

『日本海軍航空隊、孤軍奮闘の一年間』

基礎知識篇その十八 —— 空母編、後編の第十二部

ソロモン戦の前半六カ月は、飢餓と病苦と血潮に塗れた大苦戦の末に、残軍一万三千人全員救出によって幕を閉じました。

しかし陸軍はこれを恥辱と受け止め、なお頑強にガ島奪回の旗印を下すことなく、大本営もその方針を支持し、後半戦はその出発点からすでに陸海軍間に戦略の不一致を包蔵していました。

海軍側としては、前半戦で消耗した艦載機と操縦員の補充・増強を図り、一旦は戦線を後退させ、戦場からの距離が遠すぎるラバウル前方の前進基地の建設を待つて反撃に転ずるといふ戦略でしたが、これを消極的と解釈した陸軍は、自力で物資・人員輸送用の潜水艦の建造を試みたり（失敗）、以前にも紹介したように、陸軍の某大佐が機密費から莫大な金額（以前の数字は不正確）を支出して特大戦車を試作したものの、重すぎる完成品が道路を破壊し、大失敗するなどの迷走があり、徒らに傷口を広げるだけという、場当たり的な出費を重ね続けていました。

この戦車の挿話などは、実地的確に当時の陸軍上層部に蔓延していた体質を象徴するもので、かつて司馬遼太郎がかなり婉曲な表現ながら「陸軍全体の腐敗は、大陸での紛争に深く関与したのに始まっており、いつしか自らが腐敗の構図に飲み込まれてしまった」と総括した通りでした。

実証性を重視する氏は、その病根の具体的な指摘は避けていますが、おそらくそれが膨大な機密費の濫用であり、さらにはその主要財源であった阿片の専売利権であったのは容易に推定できるところです。そこでさらに典型的な一例の詳細を挙げることにします。

中川靖造著「海軍技術研究所」に、戦時中、東大第二工学部から海兵団を経て技術少尉となり、戦後はソニー創業者の一人となった北条司郎の体験談がかなり詳細に記録されています。

それによれば北条氏は、東大在学中の昭和十九年春、当時第二工学部教授であった平田森三教授から極秘の依頼を受けたそうです。

「実は軍のある機関から特別の研究を頼まれている。内容は最高機密であるから親元も離れ、自分たちだけで行動することになる。希望者は申し出るように」ということで、北条氏ほか二名が選ばれ、彼らがまず赴いた先が丸ノ内ホテル。会見したのが東条首相の命令を受けたと称する陸軍中佐の影佐禎昭（かげささだあき）でした。

このあたりから胡散臭いものがありますが（理由は後述）、影佐中佐の依頼内容は、敵潜水艦の魚雷攻撃の被害が甚大なので、海軍に対し対応策を指示したが反応が冷淡であった。そこで陸軍として独自に新兵器を開発したい、というのがその趣旨でした。

対潜水艦用の防雷網についてはすでに海軍側で徹底的に研究済みであって、平田、北条らの努力も結局は不成功に終わってしまったのですが、問題は、ここに登場した影佐禎昭と称する人物の不可解さにあり、次にはこれを企図した陸軍の異常な体質にあります。

影佐禎昭という人物は実在しています。彼が最も活躍したのは、東条英機が少将として満州国に関東軍憲兵司令となり、次いで参謀から参謀長に昇格して実権を掌握した時期に重なっています。当時の影佐は参謀本部第八課に属し主に謀略・諜報関係を担当していた時期で地位もすでに大佐です。しかも一九三七年十月にはのちに阿片王と呼ばれた宏済善堂の里見甫（はじめ）と接触し、満州ルートに対抗する上海ルートの開拓を画策していた事実があります。

この時期に中佐でいることも、かつて阿片ルートで東条と対立関係にあった彼が東条の指示で密命を帯びることも有り得る筈がありません。真つ赤な偽者か、当時反東条運動を結集し始めた海軍側を牽制するための攪乱作戦としか考えられないのです。

しかも実際の影佐禎昭はこの時期には東条によつて中央から追われ、ラバウルの第三十八師団長に就任していたことが戦後判明しています。東京裁判では、陸軍の犯罪の重要証言者として訴追された里見が、おそらくは司法取引によつて釈放されたために、影佐も同様に訴追を免れています。陸軍が里見を使って阿片の独占販売権を手中にし、それを機密費として独占的に使用していたのは、決して歴史から抹殺できない真実だったのです。

（千賀基史くせんがもとふみ ― 著の『阿片王』によれば、一九三九年から開戦前年の一九四〇年三月までの里見機関經由の阿片販売累計は700箱。一箱1920両で、一両12円換算日本円での合計は1612・8万円。うち商社への支払い403万円、興亜院という各省庁の合同組織が500万円、里見機関が240万円、汪兆銘の南京新政府が470万円という配分です。これに対してほぼ同期間の輸入総量は約五千箱で七倍を越えていますから、陸軍との独占契約に成功してからの里見機関の扱いは飛躍的に増加したものと推定できます。さらに里見から先の密売段階になると、建前上、日本軍は関与せず、すべて里見と現地人組織に一任されており、そこでの利益はさらに数倍に達すると推定されます。日本陸軍という強大な用心棒組織を背にした里見の独占利潤は甚大だったのです。

やがて金の匂いに敏感な有象無象が里見の周辺に群がりました。陸軍の高官級や政治家などの要人の噂が数多く残されています。海軍関係者は全く噂にのぼることはありません。おそらく情報が必要で、東京裁判での海軍に対する心証の好転に決定的に影響するとは、当時の誰にも予想できるものではありませんでした。)

東京裁判での里見の証言によれば、南京政府と陸軍と里見がそれぞれ三分の二の取り分だったこと、イランからの輸入阿片だけで二千万ドルに達したことなどが伝えられています。それ以外の中国産や蒙古産、満州産などの取引実態の詳細についてはすべて隠蔽されたままであり、真相は(おそらくは司法取引によって)永遠の謎の彼方に消え去り、里見は釈放され、かつて彼の金に群がった陸軍の高官や政治家たちもすべて当初から訴追を回避するか、途中釈放されるかして、戦犯を免れることになりました。

ソロモン航空戦、米軍の主役は陸軍航空隊に

このように日本陸軍が、その組織の根幹の部分での欠陥によって迷走を続けているころ、米陸軍の航空隊が予想を遥かに上回る活躍を示していました。

松浪少尉の論考に登場する米軍機のうち、F4F、F4Uコルセアの戦闘機、TBF雷撃機、SBDの急降下爆撃機などが海軍機。一方、B17、B24、B25などの重爆撃機と、P38、39、40などの戦闘機が陸軍。これらが海軍機以上の成果を挙げました。

P38は山本長官機を撃墜したことで日本にもよく知られていますが、双発の計2650馬力以上というのを生かし、時速636キロ、20ミリ機関砲1、12・7ミリ機銃7を以て日本軍を苦しめています。

P39は当初は零戦と同程度の速度のため惨敗し、主にソ連向けに輸出されましたが、余裕が生じたころ対日本戦線にも投入。略称のエアコブラの名で、それなりによく使われました。

P40もP39並みの戦闘機で、頑丈さを買われ、やはり輸出を主体にしていましたが、部分的な改良を重ねたのと、複数攻撃の徹底などの新戦法によって、ようやく零戦と対等に戦える状況となってソロモンの戦場に戻ってきました。

以上の陸軍の三種類の戦闘機はそれぞれの生産総数は一万機前後と、奇しくも零戦のそれとほぼ同数。しかも米陸軍機には、さらにそれ以上の性能と生産数を持つ戦闘機が二機種ありました。

その一つが、海軍機を含めて最大の生産数の15、660機を達成したサンダーボルトP47で、もう一つが数では僅かに劣っていたものの第二次大戦の最優秀機と評価された Mustang P51。生産数は14、819機。

この二つの戦闘機は機能が明白に分かれていて、P47は二千馬力のエンジンを搭載し、12・7ミリ機銃8を装備した超重量戦闘機で、最高速度も時速676キロ。欧州戦線を主な活躍の舞台として、大戦中の総破壊機7000、うち空中戦での撃墜3752機。対地戦での戦車と装甲車の破壊数6000輜。もしソロモン戦に登場したとすれば、零戦の最強の敵となって、速度と機銃数で遠く劣る零戦は、その運動性能を活かして、ひねり込み急降下などの秘技を駆使して相手の背後に廻り、零戦最大の武器である20ミリ砲を叩き込む以外の対抗手段はなくなっていたでしょう。

P47の対日戦での登場は一九四三年六月のニューギニア戦線。日本側の記録には全く残されていませんが、おそらくこの地域を担当していた陸軍機は何らの抵抗もなく、壊滅されていたと思われるのです。

P51のエンジンはやや小さい二千馬力でしたが、P47よりも1・2トンほど軽量のため、時速は703キロとP47を越える最速機です。この機種が真価を発揮したのが超大型重爆撃機B29の護衛機としての任務です。12・7ミリ機銃6を備えて護衛に当たり、近づく敵戦闘機を Mustang (mustang―野馬)のごとく蹴散らし、日独などの戦闘機隊を苦しめました。

ここで私たちは奇妙な事実気付かなければなりません。

第二次大戦中の航空戦の文献、手記の数は極めて多いのですが、米陸軍航空隊に関するものの数が極端に少ないという事実です。

この随想を始めてから約十年。それ以前の数年間を含めて、参考にした文献類の数は、その質を無視して、優に千冊を越えるでしょうが、目的に叶ったのはただ二冊だけでした。

ここで引用したのが「太平洋戦争研究会編著」の「零戦と日本航空史」で、内容の確認のためにあと一冊から一項目だけを摘出して照合し、事実の再確認の参考にただけでした。

ソロモンの空の戦いの後半戦では、わが海軍航空隊の主要な敵は米海軍航空隊ではなく、合衆国陸軍の航空隊でした。

米海軍の新鋭艦載機のF6Fはまだ戦場にその姿はなく、F4Fだけならば怖れる必要は毛頭ありません。しかし、P38以下の米陸軍航空隊が登場すると、局面は一変してしまいます。

前半戦の激戦で極限に近い消耗を強いられた日本軍海軍航空隊は今、新たな強敵に直面することになったのです。

米陸軍航空隊という新手の強敵は、P38を先頭に、次々に新鋭機を投入してきました。しかも迎え撃つ能力のあるのは海軍航空隊だけです。彼ら零戦戦士たちの孤独な戦いの始まりでした。

ここで思うのは、まず第一に、なぜ大本営がこの状況を的確に分析し緊急対応策を講じられなかったかであり、次に戦後の論者がなぜこの点をソロモン戦最大の問題点として追及しなかったかです。

当時の大本営の混乱ぶりを見れば、当時は気付くはずはなかったと見放すこともできますが、それならば戦後の論者がこの重要な事実を無視して議論を進めているのは、弁明の余地もないのです。

たとえば例の「海軍反省会」にしても、誰一人としてこのソロモン戦での一般的な局面判断の誤りや、緊急対応策の必要性を語る者がなく、徒らに死者を鞭打つだけという、戦後の論調の大きな歪みを象徴しているだけなのです。

零戦限界論の歪みと、米陸軍航空隊

戦後、通説化した説の一つに、米軍機に比較して零戦には多くの欠陥があり、戦況の進展と共にそれが日米航空戦力の格差の原因となってきたという、尤もらしい説があります。

その代表例として操縦席の防弾壁が貧弱で、しばしば操縦員に着弾し、死亡を招いたということが強調されました。中には人命軽視の日本軍の本質論まで語る論者まで現れていました。

これに対しては少数派からの反論があり、米軍機の防弾壁もほとんど効果がなかった、零戦も漸次強化して対応してきた、などの意見があり、次第に冷静な議論に落ち着きつつあるのが現状です。

議論が冷静となってきた根本の理由は、人命という点では、戦闘機操縦士にとって最重要なのは機の撃墜の回避であり、その目的を果たすために零戦の軽量化があるという本質論が見直されてきたからです。しかも現実にはその本質を崩さない範囲での零戦の改良は何度も進められていたのが実態なのです。

しかしいま、米陸軍航空隊を検証している過程で、その議論にさらに明快な答えが存在しているのが分かりました。というのは、資源が豊富で、高度な技術基盤のある国家と、それが乏しい国家では異なった選択技があるのが当然という答えです。

日本には、米陸軍の航空隊のような、四基エンジンの超大型爆撃

機を持つことも、強力な高馬力エンジンを搭載し、最高速度を目指した戦闘機を何種類も並行生産できるような工業力もともと存在していないのです。だからこそ日本海軍は零戦を集中生産したのですが、それでも戦時中を通じての合計は一万機を辛うじて越える程度であり、それは米陸軍の主力戦闘機五種のそれぞれに及ばないかのようにやく上回る程度なのです。

零戦は日本海軍が生み出した、近代日本の奇跡でした。それを日本海軍の精鋭たちが、月月火水木金の年中不休の猛訓練と、各操縦士個々の工夫と努力によって、世界最強の戦闘機隊に仕上げたものでした。それを陸海平等の枠に押し込めて、実戦部隊を言語に絶する状況に追い込んだ人たちの責任は、極めて重大と結論するしかないのです。

逆境の零戦航空隊、なおも闘志を失わず

ガ島に最も近い大きな島はニュージョージア島です。ここに海軍は前進基地のムンダ飛行場を造りましたが、俄か造りであり、規模も小さく、多数の零戦を常駐させることが困難でした。

米陸軍の爆撃機は頻繁に爆撃を繰り返し、その無力化を狙いますが、容易には上陸して占領するまでには至りません。結局八月初旬に日本軍がその隣のコロンバンガラ島（略称コロ島）に転進して、米軍が占領。まず第一戦は米軍の勝利に終わります。

この間、力を蓄えていた米軍は、得意のリープフロッグ作戦を陸海共同で展開してきました。

まず六月二十九日、悪天候の中、隠密行動の巡洋艦隊がコロ島対岸のレンドバ島に接近し、先遣隊を上陸させます。後で判明したことで、米軍はここに重砲基地を建設し、対岸のムンダの日本軍の壊滅を図ったのです。記録は残っていませんが、おそらくは陸軍の重砲隊だったと推定されます。

というのはこのころ、ハルゼーはマ將軍から海軍のNO・1と賞賛されて、大いに舞い上がっていたとされるので、海兵隊の大砲よりも威力のある陸軍の大砲を借用した可能性があるのです。

こうしてソロモン戦の後半戦の第一の山場が始まりました。

海と空と陸と、勝負の結果はわかっているのですが、そこには多くの人間ドラマがあり、勇気と闘志と知恵の戦いがありました。

しかも歴史の精妙さは、この絶望的な状況の中で、すでに戦後の日本の繁栄を暗示する曙光を窺うことができるという事実です。